

辰野五輪物語

【後編】栄光から未来へ

～市口政光氏のインタビューを通して～

今から 55 年前、東京で行われた世界的スポーツの祭典に、当時当社社員の市口政光氏が出場した。前編に引き続き、市口氏の話と共に振り返る。

～1964 年東京五輪までの道のり～

『絶対に自分は自信があるという確信を持っていたからね。』

東京五輪出場はどのようにして決まりましたか？

まず、オリンピック出場選手に選ばれる 1 年前に世界選手権で優勝しまして。その後、オリンピック前には海外選手との試合も多く用意されていたんですが、海外の選手にも抵抗なく戦えましてね。そして、オリンピック出場が決まったんですよ。

でも、東京オリンピックの 10 日～2 週間前に捻挫をしてしまったんです。怪我をするまでは少し自信過剰になっていて、僅差で勝つかではなく完全勝利を狙っていました。絶対に自分は自信があるという確信を持っていたからね。

～本番直前の怪我を乗り越えて～

『怪我の功名で慎重になれた。』

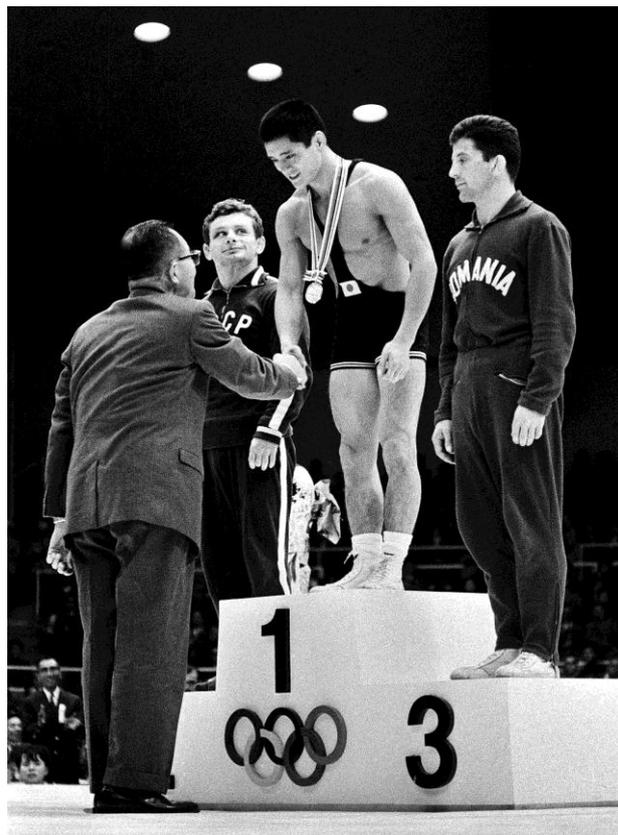
怪我をする前と後では考え方に変化はありましたか？

考え方は怪我をしてからぱっと変えて切り替えましたね。4 年に 1 回しかないオリンピックで、しかも 1 回目のローマオリンピックでは実力が足りなかったのが、東京オリンピックでは必ず勝たないといけないと思っていたからね。

(それまでの戦い方とは違い)丁寧に勝つとい

うことだけを考えながら試合をやったんですよ。怪我の功名で、慎重になれてね。それが結果として、良かった。

こうして 1964 年 10 月 19 日、5 試合を勝ち進み、市口氏は見事金メダルを獲得した。



【写真提供・産経新聞社】

～金メダル獲得後、コーチとしての日々～

『その時期、その時期での目標を設定するのが大切だと思うんだ』

東京五輪後も辰野株式会社の社員として働かれていますか？

引き続き、辰野でお世話になりました。（東京オリンピックから）1年ほど経った頃、アメリカからコーチとして来てくれないかという話が舞い込んできたので、当時の辰野社長に「会社を辞めて渡米します。」と伝えたところ「辞めなくていいから。籍は置いておいたらいい。帰国した後すぐ仕事が見つかるわけでもないし、休職という形を取ろう。」と提案してくださって。非常にありがたかった。

異国の地に選手ではなくコーチとしていく決断をする際、不安はなかったですか？

スポーツマンだから外国の人とは以前から交流があって抵抗はなかったね。言葉の面は、気の利いた話はできないけど、基本的には通じていたように思うね。

アメリカに行かれたタイミングで、ご自身は選手からコーチに転身しようと決められたんですか？

そうですね、その頃からずっとコーチだね。やっぱり、プレーするより教える方が楽しいね。教えている子がみるみる上達していくのを見るのは本当に面白い。

アメリカでのコーチを2年間続けた後、帰国し、当社で1年程会社員として勤務。その後は大学教員として長年レスリングを教えた。指導者として、どのように選手と向き合ってきたのか。市口氏らしい指導法を語ってくれた。

私、関西出身でしょ。関東の大学同士だとライバル関係になるし教え合ったりすることはあまりないけど、私は関西出身だからそんなの関係ないし、良い選手に声をかけていたら選手もやる気になってくれて。

八田一郎さん（当時のレスリング協会会長）も私のそういうところを買って、強化コーチにしてくれていたね。東京オリンピック後、メキシコ、ミュンヘンのオリンピックではずっとコーチとして行かせてくれました。

コーチとしてはアメリカに行って訓練したから生徒にやる気があるかないかというところを見抜く能力もあったね。

あと、教わる方も良いとこ取りしないとね。いろんな人がアドバイスしてくれるけど、本当に良いアドバイスかどうかを見抜いて、良いアドバイスに対しては鍛練するようにしていました。そこを見抜く能力は私にはあったね。



今は子どもたちをメインに教えている市口氏。指導の際には、あまり五輪の話をしないうという。

（子供に指導する際）あまりに小さい子供にオリンピックの話をするのは逆にプレッシャーになると思っていて。その時期、その時期での目標を設定するのが大切だと思うんだけどね。

～これから 2020 年、そして未来に向けて～

『ただ教えるだけじゃ駄目で。そういうところは辰野にいて分かった。』

今、改めて振り返ってみて、市口さんにとって前回の東京五輪は大きな転機になりましたか。

そうですね。レスリングを通していろんなことができたので。

(大学の助教授として)論文を書かないといけなかったんですが、日本語で書いた論文をアメリカ在住の知人に頼んで英語に訳してもらったこともありました。その方としっかりディスカッションしながら2年間で完成して提出しました。東海大学の体育学部の教授も英語で論文書くようになったと驚かれましたよ。おかげで1年後には教授になれて。ただの教授では嫌だと思って、いろんな人に教えを乞いましたね。ただ教えるだけじゃ駄目で。そういうところは辰野にいて分かった。そういうことを教えてもらったよ。

(インタビューを通して)市口さんはいろんな方にお話を聞かれて、それを吸収してこられたんですね。

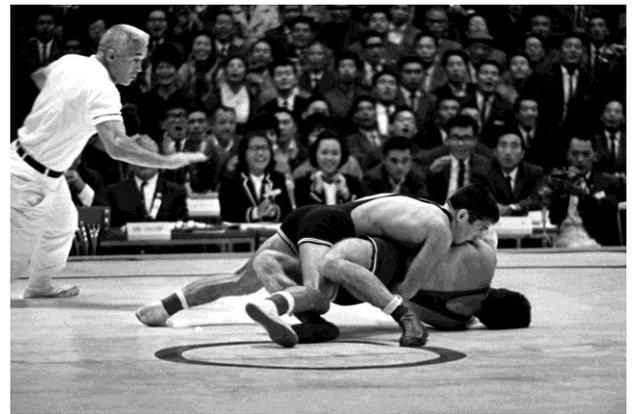
まあ、良いとこ取りよ。

今の目標を教えてください。

いやあ目標といっても、子供たちに教えているのも週1で、楽しくやってるよ。自分がこれにのめり込まないようにしているね。孫が7人いるしね。高校から幼稚園まで。でも誰もレスリングはやらない。孫にはレスリングをさせると(指導で)怒ってしまうから、他のスポーツをさせているんですよ。その方が私としては気が休まるしね。

最後に、これからの若手に向けてのメッセージをお願いします。

いや、私はろくに仕事もしてないからね。会社の懐が深くて何でもやりなさいって感じだったからさ。



【写真提供・産経新聞社】

<編集後記>

気さくに色々な話をしてくださった市口氏。謙虚さと周囲への感謝の気持ちを忘れない控えめな一面と、自他ともに認める練習量から湧き出る自信を垣間見ることが出来た。

辰野株式会社の新しいことへ挑み続けるという組織風土は、昔も今も変わらず脈々と受け継がれるものであると感じると同時に、限られた環境の中でも、自分で最大限、創意工夫をし、必要な情報を取りに行くことの大切さに改めて気づかされる市口氏との対談となった。

吉川 友理子=文